

P2-32-5 17beta-estradiol および Bazedoxifene の連続療法による HRT の効果の検討

倉敷平成病院

太田郁子, 吉岡 保

【目的】Bazedoxifene Acetate (BZA) は本邦において閉経後骨粗鬆症治療薬として利用される SERM であり骨および血管内皮細胞に対しては agonist として作用し、乳腺細胞・子宮内膜細胞に対しては増殖抑制作用があることが知られている。今回閉経後女性に対して 17beta-estradiol (E2) および BZA の連続療法を施行し、その効果を検討したので報告する。【方法】当院の倫理委員会の承認および十分なインフォームドコンセントを得て更年期症状を有する閉経後女性に E2 (1mg) と BZA (20mg) を連続投与した 152 例 (54.6±8.3 歳) (EB 群) を対象とした。2 年間に渡り経時的経腔エコーによる子宮内膜厚の測定および組織診と不正出血 (PBAC) スコアで出血状況を調査し、Kaplan-Meier 法を用いて 2 年間の累積不正出血率を算出した。また 6 か月毎の骨密度、TRACP-5b および Hip structure analysis (HAS: QDR)、脂質プロファイルを測定し検討した。【成績】子宮内膜厚は 2.5±0.5 mm と有意に菲薄化し、PBAC スコアは 4.7±3.5 点であった。また骨密度は本法による HRT 施行後 1 年は変化がなかったが、その後腰椎で 104.5%, 大腿骨で 111.2% の上昇がみられ、骨強度を反映する HAS においては HRT 開始 6 か月後より皮質骨厚、断面係数、座屈比に有意に改善が認められ、特に Bending stress に対する強度を表す断面係数が最も上昇していた。(p<0.05) 脂質に関しては、開始 6 か月で有意に HDL の上昇および LDL の減少が認められた。(p<0.001) 【結論】E2 と BZA による HRT は子宮内膜細胞への刺激が少なく、脂質プロファイルおよび骨密度、骨強度の低下を予防する有用な HRT のひとつであると考えられた。

P2-32-6 ホルモン補充療法と漢方療法はともに更年期女性の不安および抑うつを早期から改善する

東京歯大市川総合病院

小川真里子, 栗原朋子, 布施由紀子, 吉丸真澄, 宮田あかね, 宮崎 薫, 仲村 勝, 吉田丈児, 高松 潔

【目的】更年期外来を受診する患者の多くに不安および抑うつがみられる。また、ホルモン補充療法 (HRT) と漢方療法はともに更年期女性の抑うつを改善することは知られているが、両治療を比較した検討は少なく、特に不安についての検討はほとんどみられない。そこで今回我々は、更年期外来受診女性の不安および抑うつに対する両治療の効果について検討した。【方法】当院の更年期外来を受診した女性のうち、HRT または更年期障害に対する代表的な漢方製剤である加味逍遙散により治療し、同意を得た上で、問診票に適切な回答が得られた 49 例を対象とした。それぞれを HRT 群および漢方群とし、治療前および治療後 4 週後に HADS (Hospital Anxiety and Depression Scale) を施行し、総スコア、不安度 (A) スコアおよび抑うつ度 (D) スコアの変化、各治療による効果の差異を検討した。【成績】HRT 群と漢方群の間で、年齢、治療前の HADS スコアに差は無かった。治療 4 週間後では、HRT 群では HADS 総スコアと A スコアが有意に (p<0.05) 低下し、D スコアについては低下の傾向 (p=0.053) がみられた。漢方群では HADS 総スコア、A スコア、D スコアがいずれも有意に (p<0.05) 低下していた。治療前後の HADS スコアの変化率については、総スコア、A スコア、D スコアともに HRT 群と漢方群の間に有意差はみられなかった。【結論】更年期女性に対する HRT および漢方療法は、更年期女性の不安および抑うつをともに治療後早期より改善し、その治療効果には差は無いことが判明した。

P2-32-7 塩酸パロキセチンは HRT 使用時のうつ症状を改善する

山形大

石田博美, 高橋一広, 山谷日鶴, 成味 恵, 吉田隆之, 倉智博久

【目的】うつ症状は更年期症状の中でも QOL に大きな影響を与える。エストロゲンは抑うつ症状を改善する作用を有するが、黄体ホルモンはエストロゲンの効果を減弱させることが知られている。本研究は、抑うつ状態にある女性に対し、ホルモン補充療法と選択的セロトニン再取り込み抑制薬である塩酸パロキセチン (PX) の併用効果について検討した。【方法】自己評価式抑うつ尺度 (SDS) が 40 点 (軽度抑うつ) 以上の閉経後患者 (23 人) を対象とした。ERT (結合型プレマリン; CEE) 群 (5 名), PX 群 (8 名), HRT (CEE+酢酸メドロキシプロゲステロン; MPA) 群 (4 名), HRT+PX 群 (6 名) に分類し、治療開始前、開始後 4, 12, 24 週における SDS と Kupperman 指数 (KI) の変化を比較した。本研究は当院倫理委員会の承認を得ており、全患者から書面でインフォームドコンセントを得た。【成績】ERT 群, PX 群では SDS 値 (前→24 週後) が両群とも有意に低下した (ERT: 47.6±2.4→40.0±4.6 (p<0.05), PX: 46.5±4.4→36.3±3.7 (p<0.01))。SDS 値は HRT 群では低下しなかった (50.8±5.5→48.8±8.7) が、HRT+PX 群においては有意に低下した (51.7±7.8→38.0±7.7 (p<0.05))。KI は PX 群で有意に低下した (29.4±6.2→20.3±8.3 (p<0.05)) が、その他の群では有意な低下を認めなかった。【結論】抑うつ状態にある閉経後女性に対する HRT では、MPA の併用によってうつに対するエストロゲンの効果が減弱するが、塩酸パロキセチンの併用によりうつ症状が改善した。更年期症状を訴える女性に対しホルモン補充療法を行う際は、うつが存在を見逃さず、適宜抗うつ薬を併用すべきである。